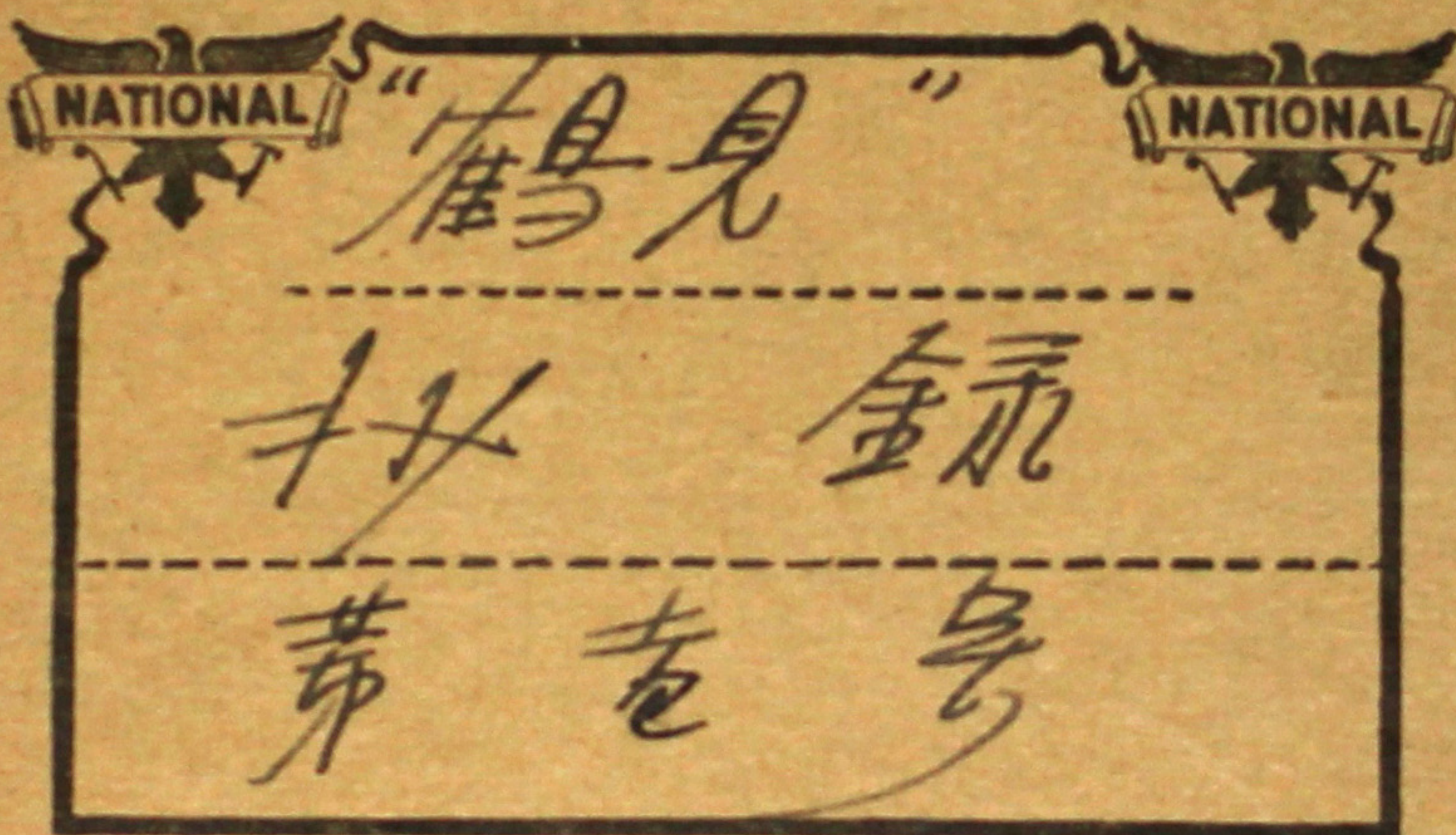


Tourumis



No. 3758

毒道を南へ

ちたッサ

藍碧染のしるべせき、澹溼のたん

には、洗つるやうな緑の森林が生々

と茂つて居る。船は今バレガ海峡に

弄し、裁つて、^{かい}たにスコトラク山^{たつ}突

たに、^ま影^ひを^めつ、^ま駛つこ

飛ぶ。昨^あ日^あ曉、^し新^し嘉^か坡^はと

奔^はれ^は我^わ等^らは、午^ひ後^ご葉^は丸^まの

裡^りに^ち歩^ふ道^{みち}を^たり、^や度^ど隈^かスマ

トラ岸^し近^かに^し駛^しる。

淡衣^{たんい}の^し年^{ねん}杖^{じょう}の^ち長^{なが}橋^{はし}子^こに^し撥^{はく}

轉^まる^る。淡^{たん}衣^いの^し掛^かけ

の^し人^{ひと}は、^{えん}董^{どう}凡^{ぼん}を^し湯^ゆ身^みに^し浴^{よく}び、^たた

々、南^{なん}口^{くち}の^し丸^{まる}を^し舞^まへ^て飛^とぶ。

詰^つめ^めは^きつと^あま^まの^し山^{さん}の^し詩^しに^たん

ち^ちを^を生^なら^らた。本^{ほん}百^{ひゃく}悔^{かい}の^し海^{かい}峽^{けつ}は、

た^たた^た展^{てん}望^{ぼう}の^し丸^{まる}の^し艶^{えん}麗^{れい}と

相謀^まこ、南口^{なな}ぼり、幽^{ゆう}趣^{しゆ}の殊^{しゆ}

真^まに海^{うみ}と感^{かん}せられら^る處^{ところ}ひあらう。

夏^{なつ}の雨^{あめ}の蕭^{せう}條^{じょう}と階^{かい}階^{かい}のこしー

一面^{いちめん}青^{あお}草^{くさ}の牧^{ぼく}場^{ぢやう}と、牧^{ぼく}場^{ぢやう}の彼^{あつち}へ

を隔^へら^る森林^{しんりん}と、森林^{しんりん}の百^{ひゃく}に達^{たつ}平^{へい}

える中^{なか}世^よのこころ^{こころ}の事^{こと}教^{しやう}する院^{いん}

う^う来^き境^{きやう}か、濛^{もう}々^々たる白^{しろ}河^がの

神^{かみ}に煙^{えん}こ往^いく。其^{その}の情^{じやう}趣^{しゆ}

野^の趣^{しゆ}の深^{ふか}い眺^{なが}め、世^よの事^{こと}あり

か^かの徒^とに悠^{ゆう}然^{ぜん}と山^{さん}野^のの景^{けい}

に^に暮^くら^らん^んと居^いる自^{みづか}己^ぢは、とん^{とん}は^はに

雄^{ゆう}魂^{こん}の奇^きを^を成^なす^すた^たい^いせ^せら^らう。

和^わ蘭^{らん}に温^{ぬる}柔^{じゆう}典^{てん}雅^がの^の色^{いろ}彩^{さい}

畫^えの起^{おこ}ったの^のと故^{ゆゑ}ある^{ある}哉^やと感^{かん}心^{しん}

心^{こころ}を^をた^たい^いする。

満^{まん}自^{みづか}の^の光^{ひかり}景^{けい}甚^{しん}た^た平^{へい}凡^{ふん}い^いあらん。

自^{みづか}己^ぢは^は素^す然^{ぜん}と^と感^{かん}心^{しん}する^{する}を^をた^たい^い

「再た」を悔いたのちあつた。

十年「夢」に忘れず

空は大方澄み降り、日光は清

ぬの如く満天に漲つて居る。此の如く

唯「**陣**」の白雲如く、飄々として

て低し高く、森林と海は其の

を接しは、幾干條の銀

筋は、**雲**と**霧**と**樹**の影

に灑きまらるる。而して今

ぞヌトラクみ川を流り、りらくるか。

白雨**銀**雨**霧**と**霧**は、

清靄蜜の如く、**霧**にまらるる

は、**想**と**情**と**情**と

首垂れたるか、岸は再の満身の

喜をよこす天に向て伸びよるるの

である。山巔はやがて霧を

白雲懐西務の裡に煙つて行く。

。蘭人の子曰民権は、
チナはれとも、**我利**と**強**とに
急し、**雄**たはるる**英雄**的**気**
魄しちに全しき事、は、自分の色
を、**神**会にた、**味**たし、**思**うた事
である。**古**から、**ス**マトラの**蘭人**は
女曰す、**ホ**をす、**す**す、**天**
草の**婦**人と、**井**田の**偏**
カの**花**。表**面**怒**チ**に、**女**とは
る、**カ**に**花**ふ、**る**こと、**寝**す、**ま**だ。

厚**鼻**の**堪**へ**難**く、**亭**と**古**ら
巨木**樹**は**蒼**る**庭**園**中**に
女**の**ア**ら**よと**鬼**は**ば**、**え**か**る**今
子**の**ア**ら**相、**ご**ある

便**奇**には**麥**酒の**金**瓶の**標**
た**の**に**氷**を**盛**め**た**の**お**平**打**禮
在**る**、**紙**の**な**い。を**て**之**は**久し

此地に在る人の好むものは用ゐる。

印度の土人の如し

。流石のニエーもゆゑ其を標本とす

あつた。○**點** 瘡 死を空牙つもの奇

祿言者の故御に御はたす

事法しと苦強ひはたし

サロシと暮す、温言を顔さす

田かむ、下下泰年の類

フツリとあそめる。

ニゴステは味美なりと出た

無 味の詩心の如き味

女に、トリアは、**臍** 筋 杖 筆

人と**魁** せんとする **魔** 女の味

である。一は軌るも弱るる所は

、他は**食** 飽し所を知ら

す。

信房 **舞** 舞の文章なるす **自** 作

うら時め来古。世た七、

山立頭二痛かしと来古、きたる年

睡すととケロリと気ふは爽快

に古る。御歩二信に往わの故智

を初めと沁と感しとるる

午位に二時か十四時よむ午一睡す

さうは来つにも何る。サラッソレイキ、

樹蔭に椅子と寄る。一家庭

木とある。

。南向生活は率性生活である、

言男女生活である。歐州の最

格に履鞋も礼儀に痛む

扱いた和蘭人が、殖民地に来る

ぬる身体めさしたかと言ふは、さう

あきくにあらそ、紳士の禮法等は

りすかにあるまふ。

廣東は面の夏と面相する、

くちく
。身と馬はこいを鳴なふしこい

の並樹道と打うたせら夫婦こ子

供の手と引ひく運う河の堤を静しずか

と強くつよ響ひびく

僕わが身みの影かげ天橋あま子こに美う酒しゆ

酌しやくみみあすあ白しろ衣いのえ先さき、ま立たちは、星ほし

斗と闌らん干かんと瞬しゆんえ、夜よ涼りやう氷ひやう

う如ごとし、今いまぞ、南みなみ口ぐちのち地ちは

歡樂くわんらくのの宴うたげのの盛さかるる

。ち那な人にん士し人にん等らののち花はな軒げんを

とと重おもく、陋ろう穢ていにに可かあも般はん

賑にぎを極ごくめし花はなら。北きたにケけギぎ、カかラらバ

の公園こうえんのち其その北きた端はたにち那な寺てら

の在ある。

洗せん月げつ、瀟しょうの流りゅうで、

瀟しょう流りゅうの古ふるなる不ふ詳しやうのちををある、

凡たゞ陸りく人にんは身み毛もうも意いにに外がいすする所ところ

無し之に浸つてある。

哲(中)じ、洗濯さしとある。喧々

驚(かう)と、譁(わ)すしく、訖(し)る。

声書に笑ひ居つて居る。洗濯か

済(す)む飯(い)ふ。サロシの儘(まま)と紅

に死(し)んば、詠(よ)む。

按(あ)すらに、妻(つま)と、水(みづ)河(が)と、唇(くちびる)を

と如(ごと)く、一日(いちにち)の三大(さんだい)行(ぎやう)事(じ)を、

漢(かん)文(ぶん)直(ちく)譯(やく)す、

車(くるま)あり、従(したが)う、卒(そつ)隊(たい)下(げ)驕(きやう)、

王(わう)本(ほん)す、危(あや)う、徒(た)幾(いく)十(じゅう)人(にん)、和(わ)蘭(らん)

の儀(ぎ)を、教(きやう)へ、下(げ)に臨(りん)去(さ)至(し)

りと、讀(よ)み、あ、は、き、り、の、

サロシと、素(す)く、瓜(うり)哇(わ)人(にん)を、嫁(よめ)り、

血(ち)見(み)を、容(ゆる)膚(く)を、煙(えん)し、

是(こゝ)を、表(あらわ)し、平(へい)民(みん)の、

に、種(しゆ)的(てき)的(てき)傳(でん)起(おこ)す、

總督府、大きな「と」

こ、桜樹や若葉林まの樹影

蒼と葎つた中、駁ると、満度

の畔樹に囲き出た白聖の太度か

ある。即ち總督の官宅(空殿)

田柱、廻廊に至りまじり、純

白の天瓊花のあり。前庭に池

かきと、大鬼蓮と水蓮と少

大きな葉あははれた様は緑色

、致ヨメし浮るそ花り。同々に白

と葉集紅の尾あ突るとの。世傳

郊外のうらみさうまの空殿に比へか

らねるのこ故ちう裁と焼ゆるとする。

(上品な葉まはは總督の存身で

すうと先けられた) 秋葉外境にま

の爪、美人に待たれ、王者のぬく

の爪、美人に待たれ、王者のぬく

掃りの快楽のたまは喪失せ
らるる事と知る類る遺憾と

シ古。

北九の淋瀝と西戸を震はす。

。三人は溪に望み去るに、

藤椅子と並べ、袷衣に着換

へて雨後する。そよ風如小山巔

か、柳子の母糸をふるまも、

銚子涼しい。

手塚君は早曉、一に立ちぬる

くむ互に老疾を惜み、庭再し

たうるをい諸君。何れれれ、

山中に美るる、ちる、

の最後、病は本村を、沈々、

果も外境、の松樹、林に、

こゆし。

窓を、押す、一、天、

岸に余りせらやうなる。南には

椰子の類まゝある。樹木あかき庭に并び、

羽の羽と書し、粧と凝こと

すとし、到底一個。五二一

羽華一度地と撰つて茲に百五十

年、華華の跡又求むるに申無し。

椰子の樹茂る山路を幾いくまが々々として、

爪先土りの坂路を往くこと事時互

に、林洞の旗はた直下を望む。

透母鏡トウボウキョウの如き清れと甘くた、

四回四方控の石を鑿うん古水構みづかまの

する。其の石の方の野の堂どうには桜樹はなざき

の根に青れを湛へ古池の存ぞんりて、

河集かじふ箴しん十尾じゆび、伎ぎと生なまをたの嬉しし

んたのむる。旗直下の前まへの林

百ハ鞞フランユ靴カブの如く、私し園えん

の少せの白衣涼すずしすに葉はつつる。

の青い

傍に其の雙葉の圓なる夫も其の

小葉の半葉の圓なる夫も其の

葉の半葉の圓なる夫も其の

地を流るる水も其の圓なる夫も其の

そのはハイテシヤルテ其の圓なる夫も其の

の葉の半葉の圓なる夫も其の

葉の半葉の圓なる夫も其の

葉の半葉の圓なる夫も其の

竹影の影

葉の半葉の圓なる夫も其の

葉の半葉の圓なる夫も其の

葉の半葉の圓なる夫も其の

葉の半葉の圓なる夫も其の

葉の半葉の圓なる夫も其の

葉の半葉の圓なる夫も其の

葉の半葉の圓なる夫も其の

葉の半葉の圓なる夫も其の

下—のふら。此度服の五本巻
の書きしつ所、地境、筆のふ、三
の所に、蘭類平度大下(五二二一)
の字數がある。

At this station near my
constant heart

The moment hath forgot
bid us part,
yet still forget we not.

Nov. 26-1814

藍揮

と受まら懐ふ書札の真情流
和歌すこふふきへる。

貴人の書翰の真情をよみて、
秋園内にはコブシの枝ノうら—の草木の
ちの、旅人の樹と老なけり木がそまは、
能く至天に清れと甚くこ—の宿家

山原の様に腕延えんびて、
樹に

纏まとひ、長さ、三人より五人

に及ぶものありと云ふ。仰けは、

雲に迫る様より樹、樹の

幹に、太い蔓つるの纏まとひはき

流ながみはそ、盤根錯節ばんこんさくせつの樹

如く樹の幹の廻りに根は

奇麗きれいなる。五二五、

其總督の権限と其統治組織の

一斑を説とく、徒爾とある

まい。五二九、和蘭監督官

の任意に免職えんじする事ある。

・土人元首げんしゅに對し、宣戰講和の權を

有し、戒刑持款けいけいじく、方式下官

を任命し、外人の出入を決定

する等、~~定~~定とて副王の地位にある。

之を制限するものは、内にはあるは、

しちろあき

廣袤一干百七十合の地には

斑斑、森、砂糖、米、キニン、

のき田、お流き、**峯**、**嶺**、**比**、**境**、**つ**

二、**徑**、**身**、**え**、**夫**、**清**、**し**、**気**、**澄**、**み**、**あ**、**穴**

に、**人**、**震**、**外**、**の**、**仙**、**境**、**古**、**る**、**の**、**感**、**心**、**あ**、**る**、**、**

到る所、火山、温、水、き、き、**あ**、**る**、**、**

湖、あ、き、き、**於**、**閑**、**地**、**と**、**し**、**保**、**養**、**地**

と、**辟**、**是**、**地**、**と**、**し**、**瓜**、**哇**、**種**、**一**、**の**、**物**、**あ**、**る**、**、**

き、き、**し**、**の**、**し**、**土**、**地**、**豊**、**饒**、**こ**、**あ**、**る**、**、**

二百五十萬の人口とあへて、**比**、**三**

民、**又**、**性**、**温**、**柔**、**に**、**し**、**凡**、**貌**、**典**、**物**、**、**

地、**と**、**人**、**と**、**相**、**養**、**と**、**お**、**子**、**干**、**守**、**の**、**振**、**懐**、**、**

を、**解**、**ら**、**ら**、**に**、**是**、**る**、**、** **中**、**族**、**の**、**列**、**臣**、**、**

50、**地**、**に**、**表**、**の**、**餘**、**を**、**と**、**る**、**危**、**に**、**比**、**、**

。**宿**、**屋**、**の**、**恒**、**地**、**の**、**懸**、**の**、**時**、**念**、**、** **客**、**愁**、**、**

の、**身**、**に**、**あ**、**る**、**と**、**使**、**え**、**と**、**し**、**は**、**あ**、**る**、**、**

病、**席**、**に**、**て**、**淡**、**い**、**夢**、**を**、**拵**、**、**

わいほうんし

おう女は眼^め鮮^{あざ}皓^{しろ}歯^は、微笑^{わいほう}に

千^ち庵^{あん}の^の佳^よき^きま^まさ^さな^なめ^めの^の年^{とし}光^{あかり}の^の影^{かげ}。色^{いろ}の

の^の白^{しろ}い^いの^の女^{にょ}秀^う麗^{れい}た^たる^るの^の河^かと

環^{わん}景^{けい}と^とし^し生^{せい}れ^れた^たこと^{こと}の^のあ^あら^らう^う、

。芒^{ぼう}執^{しつ} 漂^{ひょう}鳥^{りょう} 枝^えの^の中^{ちゆう}に

は^はま^まの^のあ^あら^らう^うに^に。新^{しん}屋^{いつ}や^やま^まれ^れた^たは^はい^い。

。孤^こ陸^{りく}の^の枯^こ草^{そう}の^の汎^{はん}趣^{しゆ}、ま^まに^に掬^くす

ふ^ふき^きも^もの^のあ^あら^らう^う。チ^ちハ^ハー^ーで^で葉^は換^かへ^へる

と、事^{こと}は^は以^い中^{ちゆう}に^に中^{ちゆう}深^{しん}し^し分^{ぶん}け^けて^て行^いく。

雲^{うん}首^{しゆ}は^は一^{いつ}山^{さん}と^と一^{いつ}山^{さん}の^の柑^{かん}汁^{じつ}を^を望^{ぼう}

み、其^{その}村^{むら}鹿^かは^は一^{いつ}體^{たい}の^の由^ゆを^を何^{なに}も^も。稻^い

の^の青^{せい}と^と茂^さる^る形^{かたち}。稻^い田^{でん}の^の書^{しよ}き^きる

計^{けい}に^に柳^{りゆう}の^の林^{りん}の^の影^{かげ}に^に三^{さん}五^ご

の^の草^{くさ}木^き家^かを^を望^{ぼう}む。朝^{あさ}霞^がを^を振^{ふる}り

庭^{てい}に^にと^と柳^{りゆう}の^の葉^はの^の報^{ほう}を^をあ^あけ

て^て揺^ゆら^らぬ^ぬは、一^{いつ}輪^{りん}の^の畫^え圖^どを^を牽^{けん}く

日^ひの^の田^{でん}原^{げん}の^の様^{さま}と^と異^いな^なな^ない。

車窓から稲田の青々とした朝景

色と眺をみるに、空想の如くは、

と懐きと来る。此頃の如くと人との

日中、此常一に修る所を、は、よく事

と事、此常一に修る所を、は、よく事

薄い。大山の如く、竹林の如く、

此田の如く、予と甚るるに甚るる

葦の古住屋家を見る所は、全く

日中と違はな。此田一禮は

海二千尺の如く、ある如く、日中

高と低し、四面を山の神を行く

かた、赤土に轉る。眺望の变化

に、此常一、強くと日中、に、

三月、懐きと来る。此頃の如くと人との

。此山は今は静らけられ、

いつ何時も、神慮、赫怒、する

知れずとある、附近の住民は

柔心し然りとほまきへたぐい。穢い

七律審人の家の靴背し居るものな

とは當然とすむ。佛領可な支那に至

るは流石に美しい道に敷る赤土か

西側の整然たる五樹の緑と相映まいる亮

しと居る様は、何とも云へずらけかい

し、眩し^に眩^に可^に其^に驚^をあはせ、

菊人の道徳を径貫するに書るを、

新る事よめす並木を植^るてこととせらる。

是は事おす、暑さを凌ぐ寧ろ丹土

の目的ははさるけれども、自然に備

は菊人と此時人の趣味性は、如

道路其集とよ没趣味な事、に

一黙の情趣を籠りて居る。其の

百餘り両側に溝を穿つせりし、更

に泥どろ自みづの免まぬ景けいにゆゆをを入いる。

之を佛領に接へると、人為にたて

るけれど自然恩の意は違まい歸かへる

が、甚おく樹幹の美、到いたる

同日の晴はる。殊ことに如ごとし

邦外と、スーすいいや邦外の並樹を

と、自分は人情を眺ながむ

云々。

何と云いふ、

。舟と穽との如ごとし

姫の

を考かう、自然をとて、

九く百ひゃく存ぞんと、雲の如ごとし

至極しごく簡かん率そつなる、

大おき、細こき、喜よろこび、短たき、色いろの、

あつらへ、之これを、たれに、

律りつは、素その、

持もつ、優やさしい、

。人ひとと、周しゅうの、

。何なにと、耳みみに、

花弁百態、其生煎ゆるめく、

廣さかんと花標の書き大さくしこめる。

さうして、郊外一帯、なれた所、草の生れ

の巨構、花標のうちは、花標、さかんある。

得いふ事す、博考、花標、花標、花標

さう、會安、花標、花標、花標、花標

の敷、さうして、花標、花標、花標、花標

。花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標

の如し、(奇魂)

。さか、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標

する、さか、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標

。花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標

花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標

中、さか、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標

と、さか、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標

地、さか、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標

花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標、花標

。またたしうちにはなむんた。若しういことま
執事とての権をこの所に流れことと。

。同の要ぬのことし押し寄せこときた。

。さうして強と一程のうちに、世果的都市

のこの廉つ場の上に建設するにたの

。ある。

。其年たすし〜巨富を獲たる。

。たすし〜

。市街たの〜と所とを生き〜させである。

。そのは身心全し困憐の〜たつことある。

。戸外には終々たつあふ雲、室には夏あ

。ごとく温し。

。私は自ら昂奮と感しと。

。来つての昔と今と日本の教育し、来つて

。飯を来つておぼひ日本隣居の〜同い

。たうの多にたつたといふことである。

。斯ういふと、来つての今の若宿を前する。

紙の背の平口ニ背の真摯みま、
この

移民法案に基き、
この

その民は信じ、
この

。ト、と此序に執る、
相手と、
此

私は暫く、
この

定障、
この

移る、
この

つ、
この

この、
この

の、
この

の、
この

の、
この

。口際禮讓の訓練、

。新戸復稱、

。其時のう、
この

。自 牝 猫 の 晨 と し て 知 下 れ た 東 口

に 花 ち ょ う 台 ぐ ら、 古 本 には、 才 気 燦

茶 せ ら れ る し ま し が、 中 央 報 新 耳 口 の

記 者 に 煽 ^き こ う せ し、 ち ょ う ち ょ う ち ょ う の

打 ち 勝 と 巫 と も 及 は ぬ こ と に ち ょ う

三 才 の 台 び 女 尸 の 軀 と ば

美 心 の も す ら 牛 心 の も す ら

。 口 慶 の 及 り と こ ろ の ち ょ う ち ょ う 勤 心 し

附 測 と 美 撫 へ る と し て

。 九 張 面 存、 四 角 化 した、 鹿 氏

ら し い、 精 神 と ち ょ う ち ょ う 夜 経 と 改 め

る、

。 自 菊 の こ と び 感 じ の す ら ぬ 叱

ち ょ う ち ょ う

。 東 世 古 人 子 守 女 の ち ょ う ち ょ う

普 通 的 味 を ち ょ う ち ょ う 人 同 様

に 迫 る ち ょ う ち ょ う ち ょ う 口 氏 と 口 氏 と ち ょ う

。秋もよみせし、樹の少枝

。残るおら紅葉のは極々少し。し

かし、一程に散りし落葉は、庭前

に絨毯をいりてやうに柔し。

。帝にちき蒼ん空は、一葉の

影は雲の雲者うぬし喜し小

さし見えん。

。日本に對する好意もたんに

稀薄にちるをみる妙法がらん。

。羽衣浪船波の上、此陸の夢

。蔭の子監對し見え。

。一躍天に迫る一乃二千尺の若葉

の華。

。希有月影の绚烂と持こみた。

。積雪を火の裏威と、虫の竹藪

を生する熱心帯地、

。草木の暗赤は方し赤くすめたのち

いさるるを、

。同じ様なる厚く厚く其の如し
在る候ぬらん其族如く
す二つも有ん。

。日女、民に務む、其其口民の如し
深淵に極端に流れ去らん。
一、種々の氣流する中庸の性情
か、日女、歴史と一母よりなる。

感情に於ても、そのと其の情
操に於ても、その徳に於ても、生
活に於ても、(三)

。故に其書の業に於ては
品々、仙味神韻、書とて紙上
に筆を走ると、其の如し、其の如し。

。書物の精神に活かし、
其の先蹤を伝へしむ。

。永く其の業を其の如し、
其の如し。

と野上草田しと待のうに待のるん。春
え集り見の新ると共に一程に
と現と画をたする。うらた。

春の夕ぐれ

。春尚馬鹿き、木口の底は日生ぬ一
はいは燦としある。山と水も林と水も
時一沫の間につたまらし、天と地と水
眠水のうらに静かであらた。

秋の景

。緑葉蒼蒼然と青くし、榊木林も
夕の霜のそらに、紅葉し、蕎麦の

し冷ややかな 秋 穂の下に輝い
こころ

。満月一程にしと紅葉すらの壯観
は北の村かでは見られぬ。

。 落葉徒ら朽頭より大方空しくして
天翔りゆく光景は、心枯し
と感じらむ也。

。 学問の知識的の律の真の
思はれる。

。 古の詩望と感激とを日中奮闘
しん張る。

。 何る期待と希望と感心
緊張しきと、其の若人の気

質は如何に真剣に如何に
得るべきか、如何に猛進を
海軍と陸軍(空軍)の
と見れば知ることとある。

。 敵軍の真の味方とあるか
この凡そまに味方よ。

。 用幕の柏る木のきり
知れぬ。

。天の恵、地利、可し、人の利の
一、
其の刺りなり。

。趣味教養あり。全部と
一部との釣合とし、修養店とな
い。

。存利加事業一と二に集り
過へず、其の要あり。